

渡部昇一著「中村天風に学ぶ成功哲学」致知出版社 2011年11月30日刊を読む

尊敬する師を持ち、そのまねをする—有意義な人生を送るための考え方—

1. 天風さんは「まねる」ということを勧めています。「まねができる人は幸せ。そうすれば全く違った人間になれる」といっています。私も「まねる」あるいは「尊敬する人を持つ」ということは、人生において極めて重要なことだと思います。
2. 現在の教育で欠陥として指摘されるのは、教科書の中に偉人の話が出てこない点です。やはり偉い人の話を聞くと、「なりたい」という気持ちが起こるものなのです。
3. また、生徒が教師を尊敬しないというのも大きな問題です。いささか手前味噌ですが、私が長年教師をしてきてわかったのは、先生を尊敬しなければその学問では決して成就できないということです。その学問をやりたいけれど先生が嫌いだとしたら、学問を替えるか、あるいは学校を替えて別の先生につくより仕方がないと思います。
4. その意味で、ドイツの「アカデミッシェ・フライハイト(学問的自由)」というのは非常に重要です。19世紀頃、ドイツの学問が一時、世界の支配的な立場になったのは、ドイツの学生に一学期ごとに転校が自由に認められていたことと関係しています。それを利用して、いい先生を求めて学生たちがドイツ中をぞろぞろ動いたのです。
5. たとえば、ヴィンデルバント(1848～1915)という大哲学者がハイデルベルクで講義したときは、ドイツ中から学生が集まって、ハイデルベルク市の家賃が上がったという話があるほどです。
6. 面白いのは、ヴィンデルバント先生の書斎の外の通りがうるさいというので、先生が「おまえたち、うるさくするなら私は他の大学に行くぞ」と文句をいったところ、市当局が驚いて、その通りを静かにさせたというのです。有名な先生がいなくなると学生たちも一緒に別の大学に行ってしまう。すると、下宿料が下がってハイデルベルク市民たちの家計に影響が出て困るというわけです。
7. そういう逸話が残っているぐらい、当時は、師を求めて学生が動くという現象がありました。これは恐らく、江戸時代の日本にもあったと思われます。
8. 今の教育制度では師を求めて生徒が動くことはなかなか難しいのですが、尊敬できる師を求めることは極めて重要です。私は幸いにして、旧制中学、旧制高校で佐藤順太先生という本当に尊敬する先生に出会ったために、先生に対する尊敬癖がついたような気がします。

9. そのため、上智大学に入っても——当時の上智の先生が皆、優秀だったかどうかはわかりませんが——どの先生をも順太先生に対するごとく尊敬したのです。私は貧乏で変わった学生でしたから、私を直接教えることのなかった先生の中には私が嫌いな先生もいらっしゃいました。ところが、ひとたび教えると、私をかわいがらない先生はいなかったと思います。それは、私を教える先生たちが、自分はこの学生から尊敬されているとわかったためでしょう。

10. 私は本当に先生方を尊敬しました。だから、先生方もよく教えてくださりました。そのおかげで、国語、漢文、英語はいうに及ばず、生物学、物理学、心理学、数学といった専門には関係のない学問もすべて私の役に立つものになりました。

P.125 ~ 128

<コメント>

「成功の実現」や「いつまでも若々しく生きる」の著者で、日本にヨガを紹介した中村天風先生から学ぶことは数知れない。この本は、「知的生活の技術」の著者で、上智大学名誉教授の渡部昇一先生が、中村天風先生から学ぶべきことをわかりやすく説いた本といえる。是非御一読を。

— 2016年7月20日(水) 林 明夫記 —